譜牒餘録　四十二

水野
土井

内閣文庫	
番號	和 16321
冊數	22（22）
函號	157　128

内閣文庫				
和書	類	一六三二一號	二二冊	一五七函　四架

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

譜牒餘録 四十三

水野
土井

譜牒餘録巻之第四十二

水野美作守

水野隼人正

土井周防守

土井式部少輔

附家臣

淺草文庫

日本政府圖書

水野美濃守附家老

水野美濃守附家老

水野之先祖無覚束不存候得共中納言道
正多田満仲之冑満政より八代小川又三郎
重清尾張之水野と申処ニ住申候故を
名字ニ仕申候其後小河村之地頭職為三四代
御座候其後水野藤九郎貞守より四代目と
右衛門大夫と申候苅屋之城を取立申候男女
之子数多御座候其内四番目之女子を
広忠様ニ御祝言被仰付候 御父子方様

中にも右馬大夫甚[illegible]下野守信元ハ中にハ
先祖之内より下野守ハ[illegible]候
下野守と申ハ付中にハ下野守か子か取立[illegible]
大形ハ女子か男子ハ下野守ハ同須ニ早申ニ
下野守藤九郎[illegible]右年大夫藤七郎
を致早世織部正を別に城地を下に[illegible]候
忠之事まても[illegible]藤十郎ハ下野守に
前取之城にまて付ては藤十郎成[illegible]之[illegible]

谷ニ及後和泉守殿ハ任に引抽兵親[illegible]
[illegible]此外之儀共を家臣之書物[illegible]
一今川義元討死抽生害[illegible]申年ニ[illegible]
永禄三年之事にて[illegible]通ハ尾張国鳴海
桶廻（迫）之間義元[illegible]
信長公之御眼前[illegible]山[illegible]突
懸り候[illegible]毛利新助切
[illegible]義元之首を取申時ハ[illegible]致

此後駿河新九郎人ましゆひ義元にしたかひ
内へ入吟味ニ而被仰出候ニ付
権現様 足柄左根之城より伊豆大森
籠居申候を御攻被成 大学と陣付被成
大高の城ニ御籠り被成候所ニ 義元討死之
風説申之に 宮崎ニ而申候ニ付 上ハ大高を
御出馬之時者 御籠城ニ被成 不相延 中上候へ
加様之時ハ虚(虚)説多きものニ候 如何ニ被成候かの
證進をも御出被成候者 何卒の
御證を浅思案ニ被成候 定て者 太原の御味
不快事よりの義元討死之事ニ候と ひそ
かに申上ル 浮候 広ゆみに大高を
御出被成候 池鯉鮒を御通り被成候ニ 所
所々より人数を出し 討留て可申
待懸申候所ニ 不成 宇都宮 上田半六と申
者 ことゝ出

摂津様ニ而申筆ニ而取前座ニ而たん候ニ
寿ふ在ニ付手きしんといふましく不申人数
右斗ハ能まか申させ候引手出御道之义
ゟ仕合村ニ弥申供ハ
一小川ニ石の涌ニ申処ニ
摂津様度ニ御働ニ被成石の涌ニて取申
後十郎新家之筆　一書ニ地ゟ人合を出
撒ニつきこハ遣候ニ候間つかにて候き

此一儀ニ付無撒被也前ニ也祝申処ニて来
見之見ニて是前ニて也後作郎より也
此之ニ申ハ被為後次郎よりか也中ハ信長公
見之とは前ニ者はかりも見ニて候ニ世
ハ筆一入拝ひより候ニて無後十次郎守
成申ハ
一日氏前座之付事ニ申処ニ
摂津様御働之被成候ニ付随ニ御前被成候

手勢ニ従テ合戦仕候ハ十時前敵ノ十八町ニ
中家ニ鉄炮構仕候処ニ手負ノ一里程ニ
先田傳市之丞ハ水野藤御瀧見候手ニ
甲ニ取付手負ニ付逢申候ハ二ノ間ニ候ハゝ本
目取ニ而戦藤次郎同藤十郎権川土左衛門
清水権之丞丹羽右衛門久米金左衛門鎮
役鉄ノ御神谷新七郎出テ討取ル討死仕
其外数多候但候ハ一ツ分ニ見申候

一刈谷水野藤九郎 申候者前ニノ城ニ居申候
義元方之岡部五郎兵衛申候者伊賀甲賀衆
ことくに濱手より出て城ニ火をかけ責入
候へハ藤九郎逢申候も不叶御討死仕候家来
其外甲賀衆も数多討死申候ハ其時分
申時分織田殿御中ニ而申候て出陣候ハ
中取候
一権現様ニハ信長公ヘ清洲ニ而申時分あいのミこ

ニ成ていまし御私佗ニ成申ニ出家仕候ハ

一三河針崎ニ一揆起り候処本坂まて　合戦
出候ニ一揆方蜂屋半之丞渡辺源蔵なと
植村庄右衛門と聞しに合せ半之丞源蔵組
縄手ニ引退候処を茂千郎是を追候ニ
一ツ半之丞取て返し候を
権現様御覧候て御乗付被成半之丞
手鑓を引候て出申候

一三河上和田ニ一揆起り候ニ付て茂千郎是ニ手取候に
何事成ん云是を中ヘ出三河鷲塚と申処ニ追
来候て此時石川飛騨殿て村越又市郎
と二人一処ニ居申候ニ、
権現様御覧候て一揆騒動御一代之御
難儀ニ思召候此時まて此衆存し候万事名
誉を仕候ハ是非御敵ニ成候とも御事ニ
て二人共ニ名誉ニ候由御覧候て存

成之ハ事ニ外法海是ニ有御派（淀）河成候
一揆ち大名ニ御堂を根城ニ致し悪
在之候申筆候而其事ニ二所ニ在りと
中所々隙ニ小豆坂と申処ニ出候ニ夫ニ而
合戦ニ付候由一揆ニ大将石川新七郎
蜂屋半之丞矢田作十郎大見藤六杯
其外ニ而候ニ石川新七ハ合図を指
構ていつれ進ミ出先ヲ付を仕候と

夫を討取申度と諸人合図と候ニ安祥ニ
細腰小ニ新七を茂十郎討取申候由
水野太郎作ハ作十郎か藤六か味方人
ニ而候を一段よき者討取申候由聞て候村越
又市郎ハ無事射手ニて出候由平鳴て
かせきうつ候ハ射（能）取候ハ
権現様ニ外御感ニ思召候
一年酒井雅楽介西尾之陣ニ而無類仕候と

入させ候所其ヶ所ハ皆敵之地なる故也
西野氏下野守より加様之事なと申来候
于時鉄炮揃之寺内ニおゐて会議候処ニ一揆
之大将陰未諏訪之房伐下野守家来上田甚六
討死ス中ニも手外雑兵六千人斗討死則其
儀へ手際申上候得共
権現様御感なされ候由承候
一遠州懸川之儀ハ今川氏真籠城ニ候

于時
権現様ハ懸川之際より入御山と申処より御陣
出被成候夫ゟ懸川ニハ御働被成日根野
備中守殿中ニハ天王山まてせり合候而
于時備中守より伊藤武兵衛中村文蔵を
出せり合中ニ武兵衛ハ備中内之種大将之
申候ニ其日武兵衛鑓無之兵衛和泉守
披倒し首取申処ニ樫原と申候

柴田前ニ至是非ニ不及申候ニ付まても
申候其時分播京ニ逆寄申候而後又
籠城尾張大郡ニ被立置候　御出馬被成
候間まて出陣候時分大谷十千郎と申者
之儀付而貝根野隙云と申者先陣
討申候事候

一佐和山の儀ハ磯野丹波守籠居候を
稲葉殿信長公と御責被成候ニ付丹羽

五郎左衛門并稲葉左京亮何茂長成候て
下野守も柴田向陣ニ而取責申候丹波殿
柴田殿人数を仕懸川取成候而申候

一信長公と越前朝倉取合ニ付而江州
内小谷合戦ニ而御下野守殿手柄を
仕信長公御感ニ而申候時ニ合戦も無
之儀ニ候事

稲葉殿御供仕手柄をいたし御感ニ及

殊ニ細成義ハ不存候得共年寄たるニ
申候之ニ通り候て出候
一遠州三方原御陣之時下野守殿依久
乃瀧川平右衛門なとゝ一所ニ向申候由申候
申候別越前殿ハ此後従
権現様御掛成之御具足之様成仕ニ而御座候ニ付
御中ニ度々御前用仕家ニ付候由申候
一権現様遠州浜松ニ而御城御天井ニ御廟

ニ付大久保七郎右衛門同治右衛門大久保一黨
越前殿大井川にて廿ヶ合ニ而をひ
候ニ付て手柄仕候由承り候七郎右衛門も
大事物ニ指物越前殿ハ白き御幣
ニ黒物ニ而中ニ而手附物皮黒きニ而申候
赤手之つきの指物にて革毛ニて候
家振ニ而越前殿浜松にて取沙汰仕
候ニ付黒き浅之様ニ申候

然処長篠ニ一揆起り申ニ付信長公より
出馬被成候津田大隅氏家来衆京より
下野守も一所ニ而手柄仕候而合戦出
勝ニ成申候由聞候ハ
一武田勝頼
権現様吉田ニ織部殿と御取合出陣候而城
ニつめ候処ニ出陣候而人数と申合戦
候処附無之候而大勢御働申候由取り合候

中鉄炮右之附ニあまた候放有之手負死候
取申候人数を引申候而下知仕候而出陣候
痛及長篠合戦之附ハ
権現様御供ニ□不参候ハ
一下野守ハ刈屋ニ被成ニ付身付之作人ニ而右衛
門尉信長公ニ讒言ニ而下野守も法付候
ニ付右衛門尉ニ刈屋を被召上候而無之候ニ
権現様御見捨ニ被成候而御首を被下ニ

然る処以後下野守ハ実ニ仕あひ申候事と
存候ニ思召信長公右近尉を被改易し
後下野守も御前へ罷出候処を無二ニ存候
一言ニ天神へ御願候時より是悟を出し
候へとも中々中書島井出右衛門押込ひら
りと申曲輪ニつき申候掛候て親無二偏
と所ニ参候ハちらりと申曲輪ニ付来り
二三度押込候時家来清水治右衛門出来

市兵衛討死仕候様
権現様御付ニ成候椎田金兵衛と申者
手負申候武田曲輪ニ参り候へハ伊兵衛二人ニ出会
掛候故ニ而此度候此時掛候ハ拾六歳
ニ而拾六歳亀松と申候信長公より感状申候
仕感状を一筆ニ前田少人事ニ付右横矢
申候大阪にて申候ハ時ニより此之大野首
ならぬと申し手柄ニハ仕候事ニ比類なき旨

候又ニて此度は浦尾甚五右衛門にて
此度は大須賀五郎左衛門ハ的場構に居
申候処ニ家康ハ中ニ城門より
手取城を取巻候処ニ柵を結び堀を
つき候へ共城中兵粮つき切出て堀を破柵
に陣どる者皆討手申候城より岡部丹波
並木横田甚五郎刑部なども先手と申者
候多く討死なされ候尤岡部丹波

大久保七郎右衛門家来本多八蔵と申もの
討付申候横田甚五郎右衛門ハ大久保七
郎右衛門殿同前に柵を切抜通り申候此時和
泉守より信長公ニ高天神之様子申上候
被差遣候ハ信長公より御書被下候
切々注進状被入情候段別而被悦候
手付城中一同迷惑ニ候以矢文起
定ゟ候て近く御赦免ニ命を御助候

岩村ハ飯坂ト古別也今ハ小山城と云ん
高天神ハ三ヶ所ニ而一段ノ要害也是を攻落シ
中今推量ニ而押ヘ之城と張取遠州内
之儀ハ申付ル所ニ家康公御仕置ニ組ん
及ハす所ニ而ハ候ハ小山ト城取候とも
此先武田四郎勝頼出て重ねて
後巻成候ハ此方ニ而ハ有之間敷候
一段ハ此ミ申候ハ金谷之鏡ハ不足候ハ

権現様御諱ハ年来信長ト年ニ一度宛之参会候
此度信長一両年間ハ駿甲ニ而一円
繁ニ付家切取候ニ越中之参会ニ者
一而事ハ御手ニ付候ハ御後巻
諏訪濃国上村出ニ而候ニ付手筈有
入実者ニ付候ハ一統ニ付候而甲國ハ
甲州入ニ付而ハ勝頼後巻ニも成候様
高天神ハ其後小山飯坂見捨

小淵沢ニ而小手郷等諸勢加勢ニ小淵
握り事不実ニ而其手前々之外大
兵ヲ共労候共女等モ可有之ハ
各別難無之者御通（權現樣御諱）ニ而
信ノ家中ニ而寵愛之旨中事
諸合戦ニ而上さ八信長思案無是
存寄出申遣者也
四月廿五日　信長　御朱印

水野宗右衛門之
一 信長公信玄ニハ出勢付瀬川越通之刻
河内なと々越之處之一戦ニ候者不及之
三鐵鑓ニ而人数之甚ニ合候ニ而申遣候
一 小笠原民部信濃押出シ甲斐國戦陣
ニ而刻
權現樣ニ而甲斐の新府中ニ而御出陣在
小付小笠原又之へ抜ニ城ニ而出立

一同日黒瀬ゟ押出し夫より焼打山ニ
引取候処其後又是ハ先日出張之古
府中へ焼立テ煙之見へ申新府ニ
押懸合戦仕候所ニ而ハ
一梯隈様として御出馬有之ニ付成候処又々御策
定而下山筋御引取能々御見合
可成候の様ニて御ふれ加成ニ陣取
仕候所在遠候ハ追路ニ押出し候時東山郡ニて

百姓共おゝく討申候ニ付鳥居彦右衛門
当掛之安人ハ甲斐古府中ニ御座
候故ニ古府中ゟ押寄し候所彦右衛門
出張之所にて御ふれと申し御座候ハ
古府中へ会ニ申遣囚鎮候と押寄し御座候ハ
其上当村へ仕候得共其後
一黒駒ニ而ハ三度ニ及候出張候而候ハ
新府ニて平安申合文親其ニ存

一中にも障る事にて候間何事も難儀
中にはたしかなる者とも殊に出し候は
事候ハゞ申もなき儀にて今日
之儀も障にて候まゝ手柄にも及ばざる事有
中務は千通の場にて申退て申捨先に存
候之宅趣を坂本之萬八東頭之内意
様にて申処ヲ清正之陣の左馬佐
存候ニ付ハ古府中ニ而小野勢にて候入

中務處ハ城ヨリ山之汀傳へ立中にて去候
出る相手返りは見人数之衆に候
被搦供入侍之者にて破候事ハ成間
敷て門外中処を搦者共押候事
引押延て時節一度門返て立合
候処ハ搦者吉田仁兵衛一番首を取
中に行の木の町と申所にて町屋
候処ハ出処にて立合二度候処

敵役畢ハすれハ佐藤忠三郎と申和
三郎様江御奉公申ハんと致浪人居申
候ニ掛ケ候者同前よ此衆ハ出たるの木の
構際ニ居る鉄炮ニて打申候是ハ討とる
其時ニ居候ハ忠ニ而ハ重友ニ弓ニ鉄炮
まて打とめ申し捨申候時掛ケ合申候処
今迄ハ見及ハ道ハかゝるの所ニ働候者
弓ニ而も打とめ申し不及是非ニて申候付

弓ハ討とめ申し候ニ付其鑓ニて候ニ付ても
候ニ付而ハ申ハへハ申候ニ鑓ニ付候
如斗ニ付てハ是非ニ申候ハ只今振見る
候て候ハ手ニ付ケ合ニ打勝ニ候ニ
候而遂打候中ニ掛ケ候与力弓ニ付
候ハ武野善十郎藤会ヲ渡候而衆人合
候ニ一番ニ付ケ遂申候掛ケ候ハ手
場ニて敵一人討取申ニ其宅無高名

家来大河内と申もの高名仕候
籠城之輩首を討取首数一百余を
以而新府ニ持参上ハ得与勝頼陣迄
差遣ん与申ニ付御ゆるし被成候ニ付
首共を勝頼見申候而喉ニ成申候以
後宗家より大道寺孫九郎を
権現様江人質ニ出し申候ニ付被
返し御縁組ニ成候而和睦ニ成申候

孫九郎事ハ其後大道寺駿河守ニ成
三十人三ケ国之城ニ遣シ小笠原美濃守ニ
相渡し申候小笠原与十郎後兵衛入道ハ
相渡候
権現様御使として紀伊大納言殿ニ被
遣候右御供仕候而御同意被成候
事ニ候一ケ年も西人へ被成置申候
其後又宗家ニ参候其後ハ浪人仕候

一 柴田修理討死之砌無二之働江北表
合戦之様子右之通申上候所御感
権現様御書被成下候
於江北表合戦之
様子顕然候
越前北庄見届甚之旨
以柴田討死之儀尤
同従是可申進候恐々謹言

右出陣之中得其意候
尚期来音候恐々謹言
五月二日 御諱 御判
水野惣兵衛尉殿

一 岡田長門 尾州星崎城主 浅井田宮丸 尾州苅安賀城主 津
川玄蕃 勢州松ヶ島城主 此三人者秀吉ニ
織田常真公ニ成敗被仰付候 長門守
将監同前ニ而天野又兵衛成敗

国立公文書館
National Archives of Japan

城よ立出候ニ付敵より越前守拵へ入
殿付
雑兵こしけ候より押出候処城か
足軽共来りし候を追返し曲輪江入
又出合付仕候を後構二ノ丸迄
蔵前ニ候て其時右之者ニ付ひしき須
加賀右衛門尉忠つゝと名高しかけ当り候ニ付 郎元丸
越前守家来鈴木与八郎鉄砲付雑
右と合右衛門尉忠つゝを搦捕候て

中ニ天野ゟ曲輪二ノ丸ニ攻裏迄掛へ来
家来久田孫十郎浅井仲殺十郎三
郎 岩家老右衛門尉忠次よ延石根
小田口ゟ其出合付焼捕城迄入候ゟ
候此時掛合も家来共も手負員多
右衛門ハ討死仕候孫十郎ハ後ニ孫右
衛門と申経島浅家郎中ニ於て五十
郎三郎ハ谷ニ数負して段戦候家半

候而今ニ存生ニて在之候者此段別
儀ニ存候ハ又ニ候處無之候様ニ被成候人子
手勢ニて常滑之城ハ押候ハ得と段
降参城ニ被成申候由ニ有之常ニ存候ハ進退
申候

一 小牧山在之ニ月八日ニ會ニ在之竜宮寺
ニ而在之押申候馬之轡ニ候ハハ故ニ
付申候へ共みな参候而申ニ在之通ニ候

小幡之城ニ而御座候ニ付前ニ申候大須賀ハ常
在處押ニ付小牧ニ申ニ多ク候ハ而無之候
得合候而候ハ而ニ合戦ニ相手ニ而候ニ
之通ニ段ニ根ニ付有之候ニ付得合候
候ニ付様ニ而候ハ危自無之候ハ候ニ
家ニ申ニ而候ハ候継ハ少斗ニ而候ニ付
治申ニ付無之候ハ故ハ大軍味方ハ
小幡ニ而候押合之合戦ハ成ニ而候

は三好孫七郎殿まつさきにて
引付追討ニ成被出て勝ニ乗雑兵成候中ニ
も討れ申候而其内ニ無二無三ニ懸候て取合
其後中ニも猶立候て朝孫七郎山取候て以下
候處ニ立候て其中丹羽勘介無二無三ニ懸入候處
手を負て追崩し中ニも此先ニ死候て酒
勝入父子堀久太郎も其外成戸備前守原
七郎ニて合戦小屋追討ニ被成候て

此にて先陣を責崩し丹羽次郎三郎
を討取長久手へ向ひ申候處ニ兵部左衛門
手にて豊後守人数を差向ケ候て備を
ふせん手勢田之際石備前守にて柳生
ら申中申處に
権現様ニ而御向ひ候て手廻立被申人数を
以筆之勢を御追崩し御勝ニ被成首を
御実検ニ被成勝関ニ而其上ニて小幡之城

此ゟ急御引取ニ成給はゝ秀吉公
龍泉寺之山ニ陣取し敵を御上方
権現様遁して龍泉寺に陣退ニ成候て
秀吉公仕切あるへし　又此度公ハ上方
衆をも小牛人ニ成候得ハ秀吉公
手をと失候ハ天下之儀ハ龍泉寺之山
御陣取候ハ本多中書ハ遁し小幡ニ
籠人数も荒手ニて上方中書人数ニ

此ヵ所人数
打取合候龍泉寺山に被合戦ニ懸ケ
ハ手引返候し大山より三関にて
秀吉公を討取へ申候天下之儀ハ此時ニ
て候得共是非之儀御分別可申候
権現様ニ者無之儀に御座候中ニ而御相談
被申候得共被合戦なされ不申候間
あまり急き御帰り候而甲之儀にて候と
急にて候ハ必天之用心　御意ニ候

机押候しくは八鋪申上　御前を
在之候まへ申候屋ぬしに能く申処ニて
也り少数ニ御馬入無御人数も御打
入候哉ニ
一長久年中公鏡より比月九日小川情なり打
出し申時押え眼病気にて不参ニて在
申ニ候へと申候ニて無之御見え申しな申
在方の甲へ何も仕め加様の時見え申

間あ加様の時見え申止たちの甲ニて何も
いま出来ニて見え申し候へ以ての外なり
申ニ候放加様ニも恥入あるまじく候申八甲ニて候
成申し候てとさ見え候ハヽ又一番有て取候
是非今日の勝負と存知見え候ハヽ無為にし
申ニ候ハ法度なと被仰候先継仕り候由
へとも申宗砌来廿四日十かへ申候て追継
まかせ候て申ニ候得共も有候由返し申候

又武ニハ太刀・弓・兵法ニ至迄一つのみ
すせ遊而為中将殿今隆の左ひにハ
小作ことく引返し有中弘て中務ハ
返中ニハ秀よ道遠くく家康様手に勝り
遊中ニハ将ニハ搦くて味方ハ其ちほ同
在一所ニハ中ニハ搦ニハ関ヶ原迄
今ニハ搦て勝ハ鑓ち鉄炮まて之
之と云ち搦ニハ河中ニハハ是まてく同在

中ニ将ニ兵ニテ大ニ原ゟ立テ中ニハ取不及
是非ニも中ニハ搦ニハ中ニハ今追の山を佐和山
なるニハ御上ハ兵くのきニ而てゟ引退せ
中ニハ搦て勝まてゟのきニハ後ニ三好孫
七郎宗長白井備後ニ宮城の弟ゟ
中ニハ引備後の備を取崩して平備ハ
云く搦て云一番鑓を取て名仕
播磨ニハ御同ニ勝て大ニ様ニ而て

ドも首を持参候時御籏本より内藤、
四郎左衛門高木主水御使番御籏
遣し当急候得共被申候時者人遣
候得共捕て藤十郎ハ手柄を被致し一
番槍之高名仕候早く
権現様御目ニ見せ候へと被申付
上覧ニ入候所ハ早く手柄を被成候と被
名付候て御蔵ニ被下候時御馬を

此所其以来小人頭之名を承候へ今之人ハ
駿河迄供仕彼地ニて果申候ニ付右
同新右衛門も其中ニ捕候首入
上覧候時よ久野三郎兵衛宗能か家ニて
十右衛門子同忠三郎ニ手柄を被成又
勘兵衛忠高ニ親子山田平右衛門 何
も首を持参候得は四ツ之首 上覧之
以後御押ニ被仰候て付 御意ニて

其方間之者ハ何と仕候とも存寄ニ成候
難義ハ先ニ承出候段家来ニ候ハ存
候之者無之儀ニ付存寄申し中上候
へハ存候て御為ニ付家来共へ申の
御為ニ付候て御借仕家来候分ニ付井伊家
難キ事候へハ我ホとの日雇ニ仕あまた之家
候處十之印も難成候て言家来候と為に付
候ニ付無難同前ニ家来候無難致候故

人数之段ニ而相は押返し其後難儀と
進退し方右之仕候ハ無難相成之
之難候と存無難ニ付十六之者家来ニ付迷
思召し申候言ニ出し候仕候ハ極
例し討为引思召候ニ申付てみれ
色実發之傷へ持出候ニ付又ニ渡組
打仕首討为中候と言ニ来筑後守
其ニ候得共久保源兵衛何方にて見申

此時之首十三印只今之廻ませ様子
樋ませ法度にと申す其日一番首お小
三ッ付取申にて一年に成是ヲ以て別格
二之物其久手一番首之拾候是を望
取にて取持之物とは是ヲ長久手小
之陣にて首の主は負に以て取の後世に候
三七申様之一番首一取に以て申にて以之小様
二之物返答之段前後に

一 秀吉公美濃江出陣之砌清洲在候付丹
羽五郎左衛門美濃之大垣之遣申処に
其之以前田与十郎常々以ての別心在之故
滝川を解生江深く内意申に付尾州
居城を乗取候二郎五郎左衛門蔵打越
其も追付に滝川子三九郎東之大手か
城に押入申に付様々子出合黒母衣
指候之半月出して中仕候とも組合

中将三種擬ニ得ス出ル所ニ寄り打取
中ニ於テ討中事ハ不届成ニ付掛ル
も種々手ヲ尽シ二万貫ノ支配中ニ被仰
指揮探城外ニ陣ヲ張り其成ル清進取ニ
成ニ処ニ於テ何公掛ルニ手前ヘ出シ奥手中上ニ
得ス其令不移手掛テ以下ニ在蔵
兵成ニ陣ヲ据ヘテ駿河ニ居中ニ板子
測在ニ

一　秀吉公伊勢路ニ出テ出陣仰付ニ而長島
尻伊勢桑名ニ出陣被仰付候而熱田ニ着
竹屋より桑名ニ在城町屋川ニ端大
福田池ニ一人押出シ陣取中ニ大福田池
継様中ニ於テ桑名破り不申ニ秀吉公ハ
町屋川ヘ向ヒ進出越ニ付此川ヲ出越ニ事
ハ不成様ニ付而ニ先田山ニ出シテ御
陣取手前西方堅メ候成中ニハ大福田迄

千石無之為居申候ニ付て来春被遣ニ可申
由にて何方も申候ニ付其後秀吉公ニ無之為
急度附先年来春於對陣之事在陣申
出し申上
權現様御供仕候由にて御申候事
土佐守会豊臣氏御家和泉守殿石
川出雲守と同前ニ成候而知行在之
一 箱館禁陣ニ付御知行ニ而

一 秀吉公御遊去之後石田治部少輔ニ付
徒党不企ニ付御
權現様ハ伏見ニ而向嶋ニ御成被遊候ニ付
附和泉守ニ夜御供仕候ニ付
不申ニ付在之ニ付而御延之
權現様御感ニ被成和泉守ハ心中ニ
御座候由御座候ニ付扶持被下候ハ
浪人ニ付而ニ附候而もよりハ伏見

御かけと申而まへに立候か和泉殿
強く掛申候付
権現様御前にて高名候事比類なく
候故　御目見ハ為仕候様ニと佐渡殿へ佐用
ニ立申候処毎夜ひそかに向嶋へ出
諸中にて世保殿山崎殿家中上にて候ハ
御意ニハ兎も角ニ申候へハ御下し
一　みのをひとつ上様より被下候

佐用ニ立候との事ニ而候へハ立身
候得共和泉殿ニ被成候て被御加増
被成候御家来人ニ御付候もの之事ハ
父子の事なと加様ニ候処ニ御
[illegible]
[illegible]
大坂御陣ニ而候ハ和泉殿御
と縦ハ其様寸上ハ勤事也申して
中にも中ニハ又　御免にて掛申候ハ

同前之趣和泉守所江申入被對面候追付可罷登
難成之御談義中ニ而東ニ而座候其後
大坂發勤之時和泉守も擬せられ候而御供仕
不越御供之由被申來候
一 權現樣會津江御働被成候刻播磨守
御供仕可致候其時分和泉守ハ荊領ニ罷在
候ゟ石田治部少輔方之加賀爪江孫八郎と申
者にて池鯉鮒之町屋ニて被果候處ニ

不慮ニ和泉守も孫八郎討申候則其場
ニて孫八郎も討死申一所ニ果申候附而
權現樣被為聞召不便ニ被思召之由ニて
座被成和泉守跡荊室之城之儀
其刻和泉守家來上田清左衛門求次
右衛門同久右衛門
御書致頂戴候
和泉殿不慮之仕合之由

互相果不及是非候て
六左衛門指越候和泉殿よ
り小杉監池九行要候様之
七月廿五日　御諱御判
上田清兵衛とのへ
鈴木次兵衛とのへ
同久兵衛とのへ

関ヶ原御陣

一大垣の城と申ハ曽祢と申處昔稲葉居
城之由堀塀も無之座城成半残りに松下
石見居申候井伊兵部殿本多中書ハ赤坂ニ陣
を取
権現様を相待候申候御譜代衆よりハ兵部
中書殿へ半ヶより外ハ上方衆ニて候大垣の
近所ニ樂田と申在所ニ座候て候ニ鳴津

陣ニ丸居申候松下石見曽祢ニ居申ニ付而
嶋津方より足軽を出し鉄炮足軽ニ被
仕候曽祢の町たつましに鉄炮撥候庭候夫
まて嶋津押込引寄候ニ曽祢の近所迄
けと申在所ニ火をかけ樂田ニ打入申候毛
時分敵中書ニ申ハ曽祢ニハ六左衛門日向守
越候てハ成間敷候条越候へと申ニ付
揃申候而大人数申分ニ而ハ条間敷候

委細ハ今度ハ御一代之極之合戦ニ候故
身上より人数多く召連御用ニ立可申と
存罷出候ニ付曽祢ニ罷越候内ニ大和口高岳
御合戦初り候故早々罷越候ニ付中々
不罷成と思く申候大人又申候大赤坂ニ
御馬着次第呼取可申と申ニ付
右ハ自然曽祢ニ罷在候へ共ならハ
御意の時ハ思く付沙汰可仕候

候ハヽ越候様にと縫殿へ申候得者参候
其日八ツ時分ニ楽田より又鉄炮之音出
申し二時斗鉄炮足軽仕候處ニ鴻津
言上し矢倉ニ上り旋を振り見ハ寂寞
の働とハ遠ク候間打入之上下知申付
足軽共皆在所江引入申候其様子ハ承候、
庄屋百姓右之趣ニて承候併家來書ハ鴻津
取次ニて候鴻津ハ定而

権現様江御出立之者共候ニ書付
其通鴻津江一ノ書ニて其晩楽田江
参候處様次ニ御座候間不承候處
者共申候披露書も楽田江越候事不承
成京坂江参り申候九月十四日ニ
権現様京坂江御着被成候刻二而ニ渡り之
挫共御迎ニ罷出候段共則大垣ニ而様子
候而尊ニ成番細申上候處家老ニ而中書

其人松忠ニ申候ハ曽祢ニ敵入候而ハ不成候間御
一言ニ不存候と曽祢ニ兵左申候様ニ申候得
条兵左申今日御一言承候日ハ御合戦始り
申候へ共是より西ニ赤坂に御陣候仕
明日ニ御合戦ニ御備ニ兵左御用ニ
立一の申候曽祢ニ参候而ハ御合戦之被成
申候条誰ニ而も被仰付被下候へと申上候処
御諚ニ曽祢之城ハ何と成とも可申と御尋被

成候昔之城形斗ニて塀墻も皆引なをし
当座竹垣を仕候ばかりにて一日と抱られ
候儘ニて者御座候と申上候へハ趣候人数を以
三日四日普請ハ被 仰付候て当座之足
遅りにも成間敷かりと 御諚ニて御座候
申之五日三日ニ而普請出来申事ニてハ
無御座候楽不入候事ニ候御座候と申上候へハ
又之御意ニ曽祢ハ一大事之所ニて

之儀申候計と御機嫌悪敷御座候手労
祢ニ存立候て御働之場ニて御用ニも
立不申儀迷惑ニ奉存候段御断り申上候
右之　御諚ニ付赤坂迄御供仕御前
ニ被成候刻兵部中書ニ六之段ニて拙者
御直ニ申上候無又　御意之趣指揮仕
家老へ数右衛門納得仕候無り兎角女人
ニ被申上赤坂御旗本ニ御暇乞被申候様

大垣へ働通候共有之候ハヽ御陣之後感召
労祢諸人押ニ是非無之様ニ被
仰出候猶又申上候ハ此度之大事之御
戦ニて御座候之存分限より之人数共多
く召連一統中ニ有御傍ニ存立御用ニも
立申度と申上候段被重而之　御意ニ候
日関ヶ原ニて後ニ立候之労祢之押ニ居後
ニ立候之同前ニ被思召候ニ付とて左様

みと達而申候へハ妻へ承申候ハ御出馬ニ迄
候而さくへ捕申付妻ハ申上候而も中々成間
敷候間 御從ニ而曽孫ニ御先へ出
申由にて身不及是非曽孫ニ立帰り抜出
存候ハ明日関ヶ原ニ而合戦ニ曽孫ニ而ハ程
遠く候得とも立不申候間兎角大垣之城ニ
罷入討死仕候とも御奉公ニ成候と存間
名市正ニ申遣十五日之夜中ニ曽孫ヲ出

手立樂田を押破り大垣之城ニ罷込
二之丸まて家取引見ニ町中ニ火を付
大垣の外ニて林と申者内ニ引取申候則
右之趣関ヶ原御陣所ニ注進仕候處ニ柄
之仕御感ニ思召候則使之者
御前ニ被召出黄金一枚被下候使之者ニ承り
申候ハ大垣家取候へ関ヶ原ニ而合戦始り候由
も罷出度候と相見へ候 御前ニ罷立

候内ニ首弐ツ三ツ上ヶ候ニ入申候を見申承候
皆々江も大垣ニ掴く候を承
仰出候を承りしと申候其刻従
台徳院様御使両人ニ罷下大垣之城ニ参ル
御感ニ思召候旨　御旋ニ出座候十日之
朝二ノ丸江押込候時城江逃入候敵ニ追
なし打込候へハ敵引返し候を撥倒し
岡田源太と申小性ニ首をとらせ申候

家来神谷金七子様町より打候鉄炮ニあ
たり其討候折節敵ハ町うらへ押込候ニ付
家来ともハ退候を大手之門際ニ来候
参候へハ其内ニ城之門をしめ候故尾内
平左衛門と申者ニ門之内江矢三筋射させ
せ候へハ矢倉ニ居候者共下江おり候時分
とまりて出さる故ハ敵共塀を越入候
来を仕候を塀ニより外江引おろし討申候

手前にて家来河村縫殿なと申ものの塀に
きりこみ首を取河村新八も首を取
川口飛入候節木田与八郎鈴木小右衛門中
山将監神谷久右衛門此者は前方小川
為に請合兵左衛門を押破家へ込申候
此時右之家来三人出合与八郎久右衛門と
鎗を合せ引込申候を与八郎も久右衛門も
甚場にて敵壱人宛討取申候松浦志摩守

方廉に高名仕候与八郎久右衛門取候節は
家来鉄炮にて打申候上田清左衛門中山将監
前事下知仕候通夜討之物も城中にて一番
名仕候大垣之城にて治部少輔残し置候大
将分福原右馬助治部少輔妹婿相良左兵衛
秋月長門守高橋右近垣見和泉守木村
惣左衛門熊谷内蔵允鉄炮五百挺相添
其人数都合七千五百有之候由申候

一十六日之夜相良左兵衛高橋右近秋月
長門守三人之名書にて城中より状を越出
其趣ハ本城ニ福原居申候間何とぞ
たばかり出し腹を切らせ残者を討
果を忠節ニ致し前々のごとく身上
被立置候様ニ仕度由申越候井伊
兵部を以家康より取次之事にて候間行衛
以前玄蕃へも被申達候様ニ杉木被

定相調候て城より首を持旗を振出し可
申候其時寄手ニ旗一二本入ニ可被申候ハ
味方共ニ寄手之中と迷惑ニ存候由申越候約
束之通国分中候由被返事候松平丹波守者
と赤坂と申所ニ足軽を以被出候處ニ陣丸居
被申候丹波守も掃部国前ニ城中より
状越候ハ丹波守ハ江重治ニ申候ハ掃部ハ於
木手八郎と申其ハ方親より用ニ立人ニ存

知たる衆のまて候者見ニ旗弐本相添城
より鉤来のごとく首を持旋を取り出候得
若き一の申候も方より見覚有之衆の
旗弐本副て差越候段忽成衆の者を
申候て事ヽ破きニ成下申候条能ヽて
申候て堅申合候ハ能處ニ十七日如鉤来
城中より相図無殺と申者總谷内荒丸
木村摠左衛門塩見和泉首を持出旋をふり

候者例鉤来のごとく半八御ニ申付旗弐本
城ニ入させ申候丹波守居ニ城ニ押
込候段指者九同時ニ鉄へ門を押
入候段九城へ候事ハなく其時ニ頁
死人多出来申候夫より引取指者ハ文林し
寺内ニ陣取有之候處從
権現様細ヽ御使被下大垣ヽ城何と哉
様ニ仕候取たく候ヽ上下り不申里御從

被成下候ニ付西尾豊後守・掃部頭両人大垣之
城請取ニ被遣、豊後守居松平周防守ニ引渡し
罷上り候、福原右京助ハ命を助け右京野
ニ送り遣申候

寅年大坂御陣

一 大和口惣御人数押し時、掃部頭ハ奈良表へ
押候、今之所 御出候御陣所ハ住吉社替
所ニて御座候、御陣所ニ而被成候割符之上
野田村ニて日向守ハ御陣所のうしろニ至
候、其ニて茂御あけ置被成候、爰ニ而渡辺
ニ而在候大坂より堺口乃海辺際ニて出来
候、堺丹後守丹羽勘兵衛旗下ニ而 仰付候

一 蜂須賀阿波守・稲葉城取申候時、御使ニ
掃部頭・京極丹後・家老居候道筋是
仕ニ仕ル、永井右近・掃部頭両人ニ而 仰付
京極丹波守ハ 御意ニ而御座候、掃部頭

より申来候故同道仕候処急ニ道筋堤
川之様ハ不存候段言上仕候伯楽ニ渕之堤ニ
甚不ろニも迄こるく何分申出申上候処右
近将監殿女人ニ而越川端ニ仕舞を致し
一 其後仕舞より大筒ニ而御寺様上致
との御意ニ而女人ニ川端ニ仕舞候
付 申候右近将監ニ相尋申候ハ、彼者共儀
御意之趣ニ仕舞を付候由言上ニ申候

一 自桃川を越仕舞之道口迄参候ヘハ明日
見合候事成申間敷候間様子次第明日
迄見合候而不参候と申候舟渡ニ付日暮
中見ニ不参候而ハ同所ニ居申候由を
右近将監相種々申候得共右近同人
立之儀兎角女人ニ而言上可申と存候而
申ニ付其外ハ右近将監同所ニ言上仕
其後阿波守殿来中村右近と申者

右之様子被御覧御旗本より日向守
罷出先駈仕候ニ射付候ヘハ此日ハ早く伯楽へ
関ハ日向守ニ承候へと申候左様ニ候ヘハ阿波守
殿中ニ楯任様多く城取候事是非無之ニ成候
とて夜ニ入候へ伯楽の関の前の堤ニ仕
寄の寄へ射申候則翌五日右近関大将宮島
めた濡候ヘハ人伯楽の関の惣ゝ中之被破
り押込申候其より阿波守ハ是も不顧

に押あけのかり城立陣取居申候
一 天満に阿波守前ニ鳩焼城に引込申候時
天満の橋焼落申候由御子成御
使者元ニ申候へ共あらかし見守り不申
候ハヽとて御機嫌ニ叶不申候其時上野
如御傍ニ居申候日向守を召而我と
罷出申候ほとん御旗ニハ天満に出申し
人数をいかさる川端まで押出し候故

手負死人有之由就中石ハ何とて御責
出来申候左様之者不行儀仕候ハ
惣人数をハ出引いまし幸天満ニ材木
沢山ニ有之由其を鉄炮たてニ仕鉄
炮之者共を立置候段と何ましも大谷迄
日向守殿ニて申渡有之 伊豆守殿へ
一 石川主殿頭ハ仙波を押込則仙波の町
陣取仕候を見居申候其後天満江出

一 小原松平右馬同武蔵守中川内膳丹
波原松平周防守有馬玄蕃頭同
内膳加藤式部少輔森美作守ニて此従ハ
森美作守横目ニハ稲殿村淑安人
式部少輔横目ニハ城和泉守ニて此段ハ
御従之者大名衆ニ不残申渡備前島
之能見ん切橋之様子見極め奥ニ言上
仕候此橋三ヶ二ツ渡し大坂之方三分一残

其際ニ焼たる橋の木共を積艘橋を
急ニ流し一中筏ニ仕立候而遣候より
見候へハ橋焼流し申様ニ相見へ申ニ付
左様ニ言上仕候ハんと申上候

卯年大坂御陣

一 権現様二条ニ御陣被成候ニ付
台徳院様伏見ニ御陣被成酒井雅楽
頭・土井大炊頭両人二条江御使ニ被遣

候節本多上野介・安藤帯刀・成瀬隼人
三人より両御所様ニ御渡被成候由
日向守儀御広間ニ而奥ニ御座候ニ付
通候へと申候ニ付何れも同前ニ仕候
通申候其時ニ御諚ニハ大和口ニて
被遊候と被思召御譜代数多在之内
色々御思案被遊候へ共日向守別而
被遊候由ニ候大和之松倉豊後守
神保長三郎・別所孫次郎・桑山伊賀守

字上ツリハ字上テハマル
又字上テニヲハアル

同左衛門同左近ニ安藤帯刀殿右近
藤堂将監也同名書付而籏下ニ有之候
丹羽勘解由も同道仕大和口ニ越申候
渡辺宗右衛門先手ニ而藤堂和泉守二番
筒井伊賀守殿組也　伊勢守ハ大和口を
罷り須奈良ニ居候故人ニ而も合セ一の手也と
仰出候ハ指出申上候ハ職就候の手上ニ罷も
無御座候ハ故得ぐち御用ニ立不申と存申上り

通り人数を召連可越候　御請ニ御座
候とも御先手を存　仰付候様ニと申上
ニと存候處ニ如様ニ成共加ニ仕合ニ御座
候と御請仕上使衆へ申上候ハ指出存候
道ニ御座候得ハ一番二の手ニ而下候ハ其子
細ハ去年大和衆を藤堂和泉守ニ被
仰付仕置を申付候故藤堂申候ハ通ニ
不仁候とも御座候ハ指出候ハ少々者ニ候

ニ候へハ御請を申上承越先ニ而手の
廻り不申時分ハ
両御所様御機嫌ニ叶申間敷と存候ハ
此段不申上候而私不調法ニ成候得共
迷惑ニ御座候間御序之刻此通被
之儀上様へ被仰上候得と申承候

一 其日之暮時分ニ日向御用候而御城へ
上り候得と上使御座候ニ付而御城へ上り

御目見仕候へハ御膝元へ近く参候へと
御意之節御側へ伺公仕候時ニ仰出
候ハ藤堂和泉一番備井伊掃部二番備
ニ而候 仰付候而其方ハ大和口より押候而
此両人と申合須奈ニて手を合せ可申候
大和者旗下ニ而候 仰付候而召連
参候
御意ニ成候ニ付申上候ハ去年七月丹

淺る右まし衣越候条同前にて候　仰付
候段と申上候処丹後をも右まし一条
首尾　御出候又申上候ハ何事も大和之元
去年蔵堂和泉守にて　仰付候事
申付候時和泉守申候を承引不仕候
も出座候而抱へハ少力なく候後に出座候へハ
若手廻り不申時ハ此段と申御越候ても
両御所様御前にて遠ひ申と申上候

ハ殊之外御機嫌悪敷候　御出候ハ大
和守蔵堂と日向をひとりはますひ
一両申試若我偏ど申候て一人試
人も陥ぶし一申思　御旋にて居候
候上ハ　御旋之趣り其果候と御出に
申上候段ちも時御機嫌なく成り申候
御側にて上野殿居候申候而扨申候ハ日
向と蔵堂と一ツ口にて何とて存候ハ日

而候ハ
上様之御名代ニ被為遣候上ニて候間
自然我侭申ニおゐてハ御誤ニ成可在
此之事申候重く 御意ニハ付度候ハヽ
人数之儀此中如何様ニも 仰付候間必其の
一本陣之儀覚悟を持身ニせすし住ニお
ゐてハ曲事ニて候 仰付と候 仰出候
則明日罷立一年中上候得ハ明日ハ出
可く候間一両日逗留候へと被 仰出候得共
申上候ハ大和國府より須奈ニ出候ハヽ
まだ京と云二日路遠く候處明日致
立一両年之中上まで在々ちる相ニ指置
申候家来在々在石一重相五日存候
去夜ハ此城之内長池と申所ニ一宿
仕と存候處奈良の代官中坊左近
從林市之坊奈良を明出立退候ニ長

池ソエ差遣申ケ様子を尋候処ハ敵ハ般山を
焼奈良ニ押込てこそ候や般若坂を
へ候由参候事申ニ成候間使申候処
奈良を屋形をい多し候処作手候甲斐
も無之事ニ候間一刻も早く致候奈
良を屋形をも申為と申ニ受ケ候て
参候処奈良ニ着候ハ松倉十右衛門
奥田之助右衛門より木津川迄

使を越申候奈良ハいまた焼不申候敵ハ
般山を焼則般山ニ陣取居申候
片時も早く急き候段者宗以
ハ登り迄一手と申越候ニ付早く急目
ニ入時分に致候奈良を屋形を不
申候中坊前林事奈良を取立退候
候不届に候と申候へハ夫より相ちよ
押績奈良江越申候中坊居屋敷ニ

一揆押込候ニ御座候又ハ中坊家付
ると悉取申候其時ニ椋子奈良の
者共不存者ハ御座有者候右之段
達　上聞候処ニ情を出し候故奈良
を度々を不申候と二条ニて御感被
抛候也義候堀丹後守ハ伏見ニ御城
之御目見ニ上り日暮候而奈良ニ越
申候

一其翌日奈良より押出し法隆寺之
着陣候其次ニ本多美濃守ハ郡山ニ
焼跡ニ陣を被居申候松平下総守
ハ六条と申寺ニ陣取申候西ノ門習
従
台徳院様御用ニて被　仰付候ニ
て拵集上御役ニ而遣り具ニ義候
則黄金弐枚被領仕候処是を相嗜る

出。陸奥守ハ暁方ニ而帰陣。陸奥守
も出國府ヲ押着申候而堀丹後守丹羽
勘兵衛も同時ニ着申候而美濃守下
総守松倉豊後守其外大和衆
何連も其晩ニ國府ヲ着被申候押
寄候備ハ美濃守其次ハ下総守陣
取被申候。正宗ハ宗良ニ居被申候
其夜下総守陣所ニ而南ノ山際ニ

陣取被申候。片倉小十郎ハ正宗より先
進而陣取在候。大和衆ハ押出申候ハ
國府ヲ向ニ片山と申山之庄ニ而下
ニあたり道明寺与申寺山之庄ニ押出
人数ハ西府ニ残し西片山ヲ押越
様子是斗陣取ニ而申候と申候へ共何連
も一段ニ案度無之被申候物見ニハ能候
不案内ニ而候と思く申候故先達而被申

江府ニ在候て家来ハ皆々是ニ残し置
候并兵部少輔へと申候留守居仕候御目付ニハ
中山勘解由村瀬左馬助両人兵部少輔
片山を見立置候処右美濃守なり
兵部少輔越候ハ片山よりハ日向守陣取仕迄へ
美濃守なるハ國府ニ陣取仕由ニ付
掛り候中候ハ美濃守なるハ設備之事ニ
候得ハ先手之者次第ニて可仕候と申

遣候付山見切不申事候ニ付掛申事ニ
候子細ハ片山ニ陣取候へハ順礼之札
所葛井寺ハ事之外廣キ山ニて
足場よく候故大坂より押出し平埜
より直ニ誉田之八幡を通り押上
候ハ敵かさより追おろし候へハ片山ハ
足かゝりもなき處まておもかく
ら手違不申候國府ハ片山よりハおくれ道

たゝり甚ある国と川とにて足軽ヶ張
取まて候ある今夜ハ是ニ可在明日ハ
小山ニ一の条とや申せハ別而孫次郎
堀丹後守両人片山にて可申ハ
美濃守より切ゝ可申越候ある兎角
此処ニ付候陣取申様ニと可申候猶
去申候ハ何とて我候たる儀可申候
権現様ハ御出に霧申候へハ日向申様

ニふ仕ニおねてハ一人も弐人も不如
御意候共陥つぶし候へと可然　御出候而重く
申度まゝに成る旨と探志忠く申渡
候故ハ左様ニ候ハゝ美濃守ハ香段委く
申とて孫次郎丹後守両人美濃守処ハ
可然候又兎次ニ村瀬左ノ可申候ハ丹
後守孫次郎申ニもく片山ニ
陣を取美濃守ハ國府ニ可然

来候と被申候様子ん申候ハ左馬ハ何とて
不存候被申候而中山勘兵衛も
方々人ハ御目付ニ被越候由申付
様ニ被成候し
安御本様江ハ日向守ことくに申候
候と可被申上候由安人江難ハ如け申
旨被成候と申候所ハ勘兵衛出日向守存
候通り御そ之通被申ニ付左候て指

志候と聞之付此座ニ居候者目付不申其ニ
國府江参り陣ニ被と申と其日ニ亡ひ
通ニ引出を取手に候ハ國府ニ陣を
取ケ申候

一同其日之夜半時分より藤井寺之松に續
候者く手之先手江者不審ニ存候丹後
守ハ其陣所指出ニ付被寄候故家
来黒川三郎左衛門と申鉄炮放ち付候處

並丹後守ハ使に越し申右之松明之
根子不審成事ニ候条今夜ハ搦手之固
前ニ奥足軽もぬこさいで其まて居候
へ片山ゟ鉄炮之者出し申さしかり（あり）て
仕出中途候て後大和元ゟと申遣す
中途し候敵ハ蔵井ちかく之前栽蓑田之
宮之坂大和ゟの道筋迄ニ押出し候
蔵又兵衛先手ニて夜中ニ片山ゟ

ありり暁方に片山の上より鉄炮打候
指挺打開先をあげ延り申候所夜不審
ニ存候處おもて遠不申候松倉奥田ハ拙
者より先片山のきしわきて細川先前
ニあて陣之至申候敵片山より鉄
炮打かけ出かゝり候附松倉子共押出し
申候時松倉奥田其外浪人共六人之
内過加助と申者とも先ニかけ出候

左京亮左近申ハ日向守人数と一所
にかゝり是迄引候者と松倉奥田に申候ハ
加助取り何とて遅く候ハ可申候
時刻移り候とて一番ニ片山へ懸候
上り鉄炮ニあたり手負ニて討死
仕候左奥田息中加助ハ討もらし候
哉又にてハ笑ひと申松倉一所にかゝり
申候奥田ハ浪人武三人と一所にて討

死仕候手前片山之中程迄押立申し
候左堀尾息中何れも高く候左崩し
平岡が里に逃り候へと申堀尾との立
一番ニ追崩し山下にて二三度合戦続
丹羽勘助ハ道明寺之此方ニ人数有
立居申候山を追崩し下ニての合戦の
とき横須賀へ堀尾同前ニ追崩し
候道明寺を追越誉田之宮より許諾

中ニ而行出候而追崩し申時も一番首を捕申候
二番ニ中山勘解由三番ニ同名英俊か肥
前ニ村瀬左馬助并遣り候道筋ニあちんさゝし右
橋ニ而右衛門尉尚ハ深田ニ而て候文を三河越中時
本多左京亮後追崩させ橋際を崩申
かゝり申時右近人之見申馬より下り
鑓を取りかゝり申候付時左京亮家来も
壱人其場ニ而討申候申候敵ハ崩申口

ニ候故さ申く引取彦井手ニ而山ニ陣を立
其其候处申白猪さん中ニ而堺田半八を河
村新八郎と申者討取申候又名誉ハ正宗
手ニ而討申候と申又ハ宗の手ニ而討候
其中候而是ニ一番首ハ家来杉野
数馬と申者取申候則備前ニ英俊か
此働ニ通ニ而被人候御横目衆ニ而右之
首を見せ申候首数無之ハ九亮之番首

と申文取たるをとめ首ニて候故是ニ書
のせ申候右之趣須賀ニ云上仕候ハ朝合
戦ニ手柄勝申首数多討取申候首を持
も罷上候て遅く上仕候間目録ニ致し
進上候旨申上候ヘハ御諚ニハ目出度手柄
並仕道明寺表にて朝合戦ニ猶首数
多く討取候旨　仰出不大形御機嫌にて
此度ハ揃ちん使之ちん松田金之亟竹中廣

助殿へ御前ニて　左出黄金壱枚宛致
拝戴候敵ハいまた藤井寺あたり平
野辺之人数を出し立まもり合居申候
正宗ゟ使者を以朝之合戦ハ猶手
勝申候敵の手きゝ申刻つけ候て平野より之
外にて大形討死仕申候由見継つけ申
候へと申遣候処正宗より返事ニハ左
有之申候所古田と三度之せり合ニ

玉案も数をさらし其上家来共いとし
手負死人数多有之候間今日清仕候得
ハ成間敷と申来候故両三度迄申遣し
候得共正宗無承引候に付横山
申候ハゝ返事も通遣し候に付とも合
敵のまゝ候につけ不申候ハゝ何とて指ぬ
候我と御役御座候時ハ如何と存候通
老候横山備え前に立居申敵ハ大野備

理森豊前にて御座候志田ハ野中村に小
高き山に備を立置候備理居申処より
ハ右るし南へ端まで候備理備追崩し候
事ハ屋まじく是非候得共手前志田横
合よりすけ候而鎗を取切候得ハ味方討
達て申候間正宗ハ志田前に押出し鉄
炮にちんを分けあんしらい申候て脇より
まで付申事成間敷候と達て申候得ハ正

宗と申候ハ右申通人をもまくらく成候今日
敵をつけさる事ハ正宗とも申候由
両御所様にも云上一の申候處跳ニて蒔
候事ハ無用にて候正宗ハ中くつけ候處と
申候て陣處にて引ハ九と申候武上ハ一の仕様
大てく候故勘解由にも申候ハ美濃するハ何
勢組下総するハ美濃組指もんハ大和組にて
候る両くよ三組ありても流ハ一の申候条と方

此目貫之事に候る美濃するにも条指もん申
通りと申候ていかにとハ申候處候る真ニ無り
申候へと申候得ハ勘解由返答に其条候
内よ日向する宗より出し候得ハおもく事中事よ
候る宗人をもちし候へと申候故其方をた
しぬこと何とて先うけて仕候哉と申候得ハ
勘解由其後よおおねてハ越美濃するに
申付候へとこの申とて刈美濃するにもし渡候

然ル所美濃守申候ハ下総守ハ何とぞ上総
とざし申候と下総守ハ美濃守次第
と申候左候て同前ニ三組たてのミ一處
ニ被成申候之勘兵衛ハ日向一派ニ従
けて申と申候処ニ美濃守申候ハ
其方請合申候ハてつけ一の申候たてなく候
て中々成る者ハ由申候勘兵衛由第
候ハ敵ニ勝まけハ何とて請合一の申候哉と

然ニ奥平衛門通も桜ちんニ番ニ罷出候
様申候由今日御中事ハあぶなけれど
たのミし事ニ候美濃守左様ニ申候て
參候事ハ成る者ハ無しにかく仕合候
候御陣ひけ候刻
權現様番出等ニ成候とこの有りして遂
感成候と存候故色々申候得共不相調敵ハ
七ツ過ニ引取申候六日ニて夜に入時分ニ

多出雲守酒井左衛門尉両人國府江被指
出候ニ出雲守事ハ其方常々知音ニて
候へハ明日先手を致させ候而強候へと被
申候摂津守申候ハ死ニ候迄ハ存候共摂津
ハ大和口先手を被仰 仰付候条左様ニ候ハヽ
被成 御前其上之事ニ一ツ可仕候
御諚ニ而先手を相すさせ候事ハ不及成
候輩若党共ニ至居候而誤合被申

手上之事ニ被致候へと申候処ハ死ニ候迄ニて
被為候

一 七日之朝國府より人数を出し大坂江押
申候處候
權現様豊嶋主膳間宮権左衛門両人を
被下日向守ハ昨日道明寺ニて首を打
内之者共手負死人数多く有之ニ付
之間今日ハ御旗本之先備被 仰付候任

藤又兵衛方へ御使として御旗差越候を相添へ申し
候 御諚之通申候 畏奉存候と御請仕、安
人之元へ遣申候ハ後藤又兵衛候てハ大坂被遣
御座候間めで度之由申候後藤又兵衛掃
部へとの 御諚にて有塙丹後守桑山左近
神保長三郎何れも後藤又兵衛ゟ掛せ申
候處越前之御人数馬より押寄候て
討死取大坂表ゟかゝり申候故見を見

中ノや御合戦も始り候と存 御諚にて候
然共後藤又兵衛討死候ハて手にあひ申 東成
郡と越前衆と同前に横田人数丹羽勘
解由大和衆何れも一所に河内野へ来ニ押上
天王寺茶臼山の向ひに備を立並候
所備ハ本多美濃守松平下総守候ニ
相備並候處ニ米倉をも御使として被下候
其様子ハ尾張殿紀伊殿御奉行ニ被

仰有候者先手合戦始め申事無用ニ
候馬をハ一町も二町も引のけ候而自分より
立鑓を持ものまて志つかにと誕り申候へ
との御諚ニ候条其分心得候へと被申渡候
其時撰出被申上候ハ御諚にて御座候得共
目さき二敵候者おもたんやく御合戦をハ被
仰候ハいつくに居るとも申者有候而御気毒
此ニ敵之人数つよく見へ申候ゆへ次第

まかせ申候申上候又二度目の御使ニ久
世三四郎坂部三十郎両人被下候是も
右之通被申渡候故松平被申候ハ本多康も
米倉ニ来申上候得共おもしろやかく御合
戦をハ御無用成候様ニ早く被成被申上
候由と申候ヘハ其通具ニ言上被致候を
頓ニ越前元持是をおし馬前四五騎
召連軽卒候而見申候ニ有之人数つき荒

江ノ方越前衆同前ノ馬足軽武三人ニ而召候
頃とも申越し候処手内ニ惣人数さしむき
延り申候故瀬先之手の先手ニ延り候所
新中候根ニ申越し候得共手様子ニ是
入不申候前桜塚備を崩し越前衆
同前ニ延り天王寺の茶臼山の根を押
込申候延り口ニハ惣人数を先ニ押立
桜塚其頃ニ越前衆ハ嫡子大炊ハ人数

残百連一昔ニ黒門通り八町目ニ町追越
天満の川端迄追討ニ仕候手前黒門
筋ヘ道大人数ニてせき一番と存揃
共ハ仙波より大坂ニ入申候案内存候
故天王寺之石ニ鳥居を越ス人数ヲ　石
見付仙波の及より城ニ参込一番と存
其後筋ニ而越候先年篠堂和泉守
仕寄を附候處ハ仙波より　石　掃

放其後を押あけ[illegible]るを
へ延中に有て味方たて籠させしを掛らん
手將馬より出り立籠を取候まも
見知りし者返しし候へと申候得共ゆゑとい
れまて皆籠まて取り申候時揆らん家来
廣田島書尾関佐次右衛門と申もん槌を合
申候島書ハ掛らん居申十四五ヶ所手負ま
て也り合討まし一の申処を掛らん手敵を

撥倒し鑓下ゝ首とい候事よ候る候首
取候へと申家来岸又右衛門と申もの首
取とらせ島書ハ討せ不申候又敵鈴入掛らん
を延り候を撥まへり申候へハ又きら人合く
梨子赤く甲に馬毛かゝり也しを有候者の
掛らん右ゝ脇に鑓取撥有余候則手塲
まて撥倒し候へハ倒より家来成瀬久
右衛門と申ものにて首を討たる申と

中ニ坂久左衛門とて〔〕し其後敵ニ行のき
敵さんさまに仕候桜の門ニハ指物旗さし一番
ニ入申候旗奉行神谷久右衛門と申ものゝ石
連を越候二番ニ越旗さし旗さし入申候此
外ハ見不申候

一寛永九年五月八日ニ加藤肥後守（出羽国へ預ヶ）居城之
同熊本を請取申候ニ指物文字を
仁右衛門同名兵作与石連を越候七月廿一日
肥後之正庵と申処ニ着申候其日ハ一揆
ニ至仰自候死中承合せ候座候ゆゑ山庵
に被遣番羽道日之銀栖木野と申処にて
人数揃仕候京口より入其日ニ熊本之城
請取申候ゆゑ八月九日ニ熊本城引渡申候

一同十四年肥前之有馬ニ一揆起り候ニ付指
上意ニ御奉書ニて御仕置ニハ板倉内
膳正殿石谷十蔵殿 松倉長門守日根野

織部ハ勝手不出来候ハ若長候ニ一分
にて志つまりかねしにて禍鴻伝流る
古沢兵庫加勢ニて仕出候　仰出候哉自殺
事度々成候て日向守も御改易
候為内々困窮仕候一方右衛門相待候様ニ
候　仰付候ハ翌年正月ニ小笠原右
近と揃候ニ御除目候松平伊豆守
戸田左門と相談之上遂一の申ハ宮城

越前ニ而石川弥左衛門ニ預ケ置候　御黒印下
し有之相当人数ニ而預備ニ左右近接候
上使同前ニ萬事相談ニ及候事
候ハ有之　仰出候同名兵衛作ニ於江
戸之　仰付候子速参上則二月八日
向ニ美作守生害致出死候共三日有馬ニ着
仕候則共八日之穢責ニ会ニ相談候
りかし候処ニ共　家ニ城ニ出しき

是ニ而者荒方あり候得ハ合の通ニ而不残成
残手知をひしと延り候故同名美作守も
手く延付本丸ニ一番乗り仕諸々城門
際ニ旗を立へ申家来共も其場ニて働
手負討死仕候もの数多御座候美作守
嫡子修理殿十四歳ニ而成候処 御前ニ
云ニ御座候而五百石遣新美作守と一所ニ知
九上道家老中ニ而夜之入ニ而人数を惑引

とくも御座候国中ニ而程亦八日迄籠城仕
し三月三日ニ落陣仕候温泉山ニ自死
一揆く残党かくれ居申車まて在之候
との儀ニて揃人数をさし山を尋
させ候処ニ一人も居不申候故引取申候
一 元和元年七月ニ加増被下六万石ニ成
大和国郡山ニ而被置候 御自ニ同五年八
月ニ加増被下候而 同拾万千石余ニ成

下備後國福山ニ居城被　仰付候新規ニ
城取立候ニ付伏見御城之御殿三階之
御矢倉月見之御櫓大手之御門鉄之御門
多門二ヶ所被下候寛永三年四月ニ者　仰付
同十七年日向守隠居同名美作守家督
被　仰付父子共ニ御礼申上候同月ニ美作守嫡
子伊織（後和泉守事）之初而御目見仕候
一　為致浪人候申之事

一　松平親子并家来ニ安永平多場と申
一　其後松平事者和泉守ヘさし越悪
致候故其松平者ヘ棄置手討ニ仕
候由承候
権現様小牧山ニ而御陣被成候付被参上
申候所後ニ高木筑後守ヲ以御前へ
被為召之被下候様ニと申上候へハ和泉守
義冒将を被召ハ以て和泉守備出而

にハ是一の事と申候へハ、
権現様御前よく仕合ハ和泉守よく御取成
て候右返候条手印ハ御存知無之方ニ而隠事
居申候様ニと候、作出小牧山ニ而無之候又清
須之須賀口之寺ニ引籠り罷在夫より方々
流浪仕候

一 拙者か始之名ハ茂十郎と申候か浪人仕候時ハ大
島と改申ハ西国ニ而殿下候刻秀吉公嶋津事

二付薩摩ニ而御立候千時薩摩之千代と申
処ニて佐々内蔵助ハ肥後之国を被遣内
蔵助彼地ニ条候刻方々より浪人を数多内蔵
助不ニ奈候ニ付拙者ハも罷越候処程なく
肥後一揆起り不々ニ働仕居候

一 肥後国山鹿之東会津之城ニ熊頭組
馬と申一揆大将籠り申候、此城ハ取り
中村大手之門を承り候き揆出申候左組

馬父子共ニ拙者討死仕其日ニ落城仕候小
谷又右衛門松下弥平次も同時ニ手越高
名仕候余多く事ニ候故一ゝ覚不申候

一山鹿之城を攻申時城後詰仕候而並河兼中
候及山康之近所ニ陣仕城を見申候三
田村左衛門と申志を見申候処内藤
助為立之志にて山崖候三田村之人数兵
粮つまり候時毛利家より安国寺扱と
して芸州を入候而も備内之古河と申処より
人数を出し兵粮の道を留させ申候而も時立花
左近兄弟ニ及諸手之手柄を仕候合戦
弥七年比林半ニて候取合相子残慶

一去之働ニ而罷候而家来ニて安田作兵衛（天正源左衛門と申者秀吉公御舎弟秀長）
と申候ハ浪人仕西国ニ罷下り左近家ニ参
候而も目の指物白手之免に許り被さし能働申
候内藤助ニてつ抜き遠藤助右衛門と

中志両人其跡ニ付テ罷出候ニ付剣を抜道家
来十将天地ニ誓候而ニ詞を合せ被
候

一 由年の城ヲ攻申候時其城外ニ山家ニ
り落候川幅広候ニ付服広さ東ヘ木畠
まて候敵川を前ニあて東ヘ木畠に入
殺数多り出し居申候処ニ掛ケ一番ニ川
を越被川ノ其川端ニて大や敵を討取申候

板羽助ニ進を首を取山田庄太夫ハ川中
ニて鉄炮ニ打れ浅井兵八郎是田将監
原半左衛門鈴木小右衛門道家治右衛門揮
績川を渡地勢ニ付て城中ニ掛けハ馬を
乗り放し歩立ニ成あけさの際ニて
又高名仕候事有敵ハ引取候故城ハ立退
不申候此時永原松雲書笹ニ指物をさ
し出ルを申候故松ちん使を立明日城責

又先年毛利方書翰ニ指揮等之中ニ見え候故也
此中ハ先年信長公越前金ヶ崎之城責
之時前鬼先鬼書翰の指揮等ニ数の働
仕りける信長公ゟ鬼先職と御呼ハ毛利方な
ども右様之指揮ハさゝらも申万事ハ無
覚めハへと申来しハ松雲返事ニ而使之
趣第庵申ハ外ニまさし指ゝ用意有之
に付書状之の指揮等之中と存ハ使者

ハ而此等托者也やめハ此ハ男をなしと申ハ
為此度ハ是非ニ而先て手之ハ後陣仕置てハ
上之中と申ハ鉄ハ放右ハて此日之働之様
子是之の中と申もハ余相整日城責之時ハ
松雲一番あたりへも不案ハ帰陣して
見出しハて馬より引おろし之の中と存ハ候
是あしく不申候

一 何宮白働之此ハ野里孫兵衛植松

大将ハ掾者方ニ二人有之申候久野里植
松ハ内記并古参之者にて御座候手紙
岩田将監浅井長八郎角作助参候其
少遅候ニ付あひ不申候此外六ッ手之御
小者共と申候一揆ニ籠り申候ハ城押破り
候時分しせり合御座候

一 小西摂津守ハ肥後の国宇土と申城ニ居
申候其子主殿助ハ熊本と申城ニ居申候

志岐天草之一揆起り申候時城主ハ則志岐
と申候有馬左衛門佐父修理と叔父摂
守にて御座候志岐より小西所ニ申越候ハ
此節之事立退候ニ付而ハ天草之加勢
之ためのとりのへと申越候ニ付小西
弥惣兵衛伊地知文大夫と申者志岐
城に差遣し申より志岐船路ニて此兩
人を二之丸下之引入夜之明方ニ城中

より撒出追討ちうち申候陳總兵濤ハ子
く退舟ニ乗沖ニ押出し候故討不申候
文右吏ハ濱端ニて小山ニ上り我父子一類叔
合三百余一所によりてうたれ申候是より
加藤肥後守ニ申合せ九月中旬小西彼地
ニ御中候肥後守とも小西ニ引續向候由
小西ハ口ニて津を守濱端ニて町ニ七日逗留
仕候此處より志波ニハ海路七里御座候

同月廿四日ニて未明ニ志波ニ渡海仕舟へ
あかり濱端ニて小高き山ニ備を立居申
處に城中より人数を出し城際ニ
立居申候時敵勢事（殊）之外さハかしく見え
候ニ付右津守ニ挨拶申候ハ敵勢色めき候
間打て延り一ノ手於ニ候ニ廣助人數を
挨拶を同前ニ先へ二の手出申候処
右申候ニ付出候ハ丹 助ハ喜兵衛ニ候何候も

利隆ハ白連指揮ぶりなとゝ申ハ伯耆守殿助
と一処よく殺さくり出し候を敵見て岡越
あけ鑓り申候其上にも西の端よりせり
合鑓仕候者ハ候時摂津守鑓を合せ鑓下より
討死申候因幡よ久米ハ其の阿波鳴渡し助も
其時高名仕候侍蔭忠左衛門ハ平楽寺事手
よ遣わ申候梅丈より追留し城まで崇瑞
町口押破りあげちやうの門二つまて仕候

押廻り丈せり合仕候ハ摂津守とは松浦ゑ
左衛門伊川兎人阿波鳴渡し助三河渡人也
因八兎吾出候甚左衛門ハ鉄炮よ討まし候夜
手くの手を申候兎人ハ摂津因幡守よ高名
仕候ニ至殿ゟ鉄炮頭よ久米孫太夫と申者
鉄炮五十挺許候て場に鉄炮五挺召まし候
候忠ハおりニ逢ゟ越申候其日摂津二度高
名…候て後二…候まハ…二つ丸乃…

七ツ前ニ中曲輪へ一番ニ一手ニ塀際迄乗込
申候時分塀際ニ後鳴右衛門吉次家中ニ
居候由比藤久左衛門同勘右衛門と申者
兄ニ指物同前ニ塀ニ付ケ候へ着申候打塀
之挟間より鉄炮二挺出させ候打申候
所を一挺ハ指物引落シ一挺ハ申候残
一挺ニて勘右衛門を腿より下ニ打ぬき
申候所勘右衛門申候ハ只今之一振ニかゝせ

候故大仕手ニて候役ニ立不申候ニ付左様ニ候
ハ只今退候故と申勘右衛門を助出し候
時鳴波助小性清吉と申者鳴波助
見候て一番ニ参り指物指物を見合
先を乗越候と申候處右之通ニ候只今
乗込候得指物側ニ居候と申処ニ其場
ニて鉄炮ニ打申候得共申候肥後守殿
日本被下候着申候天下無双之一挨

大友民部大輔ハ志々伎ノ後巻ニ押
出シ城ヨリ東ニ當ル山ニ陣取玉ヒ候処ニ
肥後ノ人数ヲ押出シ天草乃者共ト
合戦候處ニ肥後ノ先手ニハ山岡右近
名字ヲ忘レ候 紀希ト申候 恩田将監并彦右衛門 将監嫡年
鉄炮大将小野木織部瀧野三位ハ志々
押かゝり申候旗本ハ庄林隼人森本儀
太夫飯田角兵衛總人数ハ志々伎ニ残シ

主小姓馬廻リ半百迄ニ民部大輔後巻ニ立候
山ニ押上申候先手ハ志々伎ひとへニ
あいさ押立テ手返シ旗本ニ崩レかゝり申候時庄
林森本飯田ハ志々伎ニ肥後ノ侍共同前ニ働
キ海ニ追崩シ二三里追討ニ仕候肥後ノ
自身ニ鑓ヲ取比類働キ仕候庄林ハ肥後ノ
小姓沢田甚右衛門ト申ニ其歳十一二ニ見
へ候者ニ手ヲ合せ殊勝働申候

一　右ハ肥後ニ而御具足ニ御座候ニ付書申候
拙者ハ小西ノ手ニ而先陣いたし城を押へ罷在候
肥後之人数も小西同前ニ城を取巻申候
小西城を請取申候而其後天草本戸之城ニ
押詰数日より仕寄をつけ廿三日目ニ京落
し申候　肥後之ハ西之方より仕寄をつけ候て
足場能候得ハ東之小堀之方より仕寄
候故足場悪敷難儀候處城乗申候時分

ハ水堀を越堀之内へ渡り一番乗仕候　拙者儀二
三ヶ所鑓手負　久米兵左衛門拙者ニ同城乗仕候処
むさいきを鉄炮ニ而打ぬかれ堀底ニ落
申候　拙者ハ堀を乗り本城江着申時松
平主殿肥後ニ而ハ加藤左助と申候見申
つまりニ而拙者儀白糸いわし手ニ逢不申候
事数ヶ所ニ而中ニ存候見合も一ヶ所申候
事共ハ右之仕候段と申候本城之下

に出し候様に存候其いつれもひとつ手に敵撤崩候
時三蔵鉄炮を合せ候へハ敵撤捨に仕けさ
れのたまりもなくかゝりあひ候撤申候に付て拙
者も弓にて申候る所へかけ入引のものも拙者
ハ敵につけ入手場にて敵七人討申候其内
先かけ仕候者ハ拙者討取三人を家来
山本太左衛門林蕃之助重左衛門渡辺之助と
中ものゝ討又三人ハかちのもの討取申候渡辺之助

弓にても罷付申候

一 豊前國ニ一揆起り候刻秀吉公より黒田
如水同苗長政ニ城井之城を御責させ候
時拙者も其城へ引候に難儀に候処に志つ
たより迄いたし人殺し候とても申候事情なく
に程之手にて迄落候而在候を後殿の
下にも成にて申とひろひ候而攻申候後藤又兵衛
手負ハ後殿をいたし候ところに拙者ひろひ

ひは糧く緋の手されしを指出し見せ候へハ
又云清跪をいとし時分具足相織
のまえ也撥手くふまじ候まて夜合も是也
候紛まとに付又云清もし申様ハ云らし揚去ハ
想後厥又云清ハ跪と金俊極り申候城井
く前尾也筑前にたとひうちを盃く上
まて討也申候当僕しきたゝとも不残討為申
候ぬるも筑前守と申し揚去たに寢辰候へまえ

此座は

下野守和泉守を外しく去たく御ニて
らしこまて夜く此座は極て前り候はた
手以揚去る若年故委細を不存又首
尾也存候とも手場を見不申候ハ書付
不申候手前よりも此外の究く事有く
にて直く候はた委細よて難書記候也
一巻にて書下しし中にてハ云く候手前の候斗也

中ニ而ハ家々之事共も申候ても何ぬ候へ共ニも
時之首尾を細ニ記し置申ため書加申事
候
寛永十八年巳八月日　水野日向守勝成

御書并御褒美之祖被頂戴候覚
権現様より被成下　御書之写
於白川表合戦之様并総畠
被為越候を被見候ニ云候
阿栄田討死之後方々聞説候
進候得勢母白在出陣之上
候幸勇之尚被来者候
忠之様子之し

六月三日　御直判

水野惣兵衛殿

右ハ天正十一年柴田修理亮討死之砌江州
表合戦之様子注進仕候高祖父水野
惣兵衛後号和泉守被頂戴之候
就其表之様子先札共差越候
之儀委細自九郎右衛門事候
之旨御面一つ申候不能委細候也

謹言

霜月八日　御直判

水野惣兵衛殿

右之御書者成下之時節不申伝候
相求雖任依私出之出陣之様子
従段々越候者委細我々も申
十六濱松江令落城候間又々度々
甲表へ為御加勢長久出陣候年

并雑謝候尚替後所旋旨趣候
恐々謹言
十二月十七日　御直判
水野越前守殿

急度致啓上候仍自羽柴忠三郎
方注進状迄上申候然ハ政宗ヵ
振一向ニ是届候為自身て致出馬
候由申越候寔元来無正申付

一向ニ其意候先々人数申付候為御心
安て被思食候委細者口上ニ申含
候条此表之趣て能様可被仰披露候
恐々謹言
十二月三日　御直判
浅野隼人正殿
冨田左近将監殿
水野和泉守殿

右之御書直通高祖父和泉守致
頂戴同名年人四家ニ相伝所持仕候処
成下し時節不申伝候

権現様ヨリ御具足　高祖父　水野和泉守
　御兜　頭形黒塗
　御鎧　佛胴黒塗　緋糸威
右ハ元亀三年遠州味方ヶ原御陣之刻
致拝領代々相伝所持仕候

台徳院様ヨリ黄金五枚被下　曽祖父　水野日向守江
右者卯年大坂御陣之時奈良を敵ニ
焼候を不申後注進仕則和州法隆寺ニ
而致出仕候伏見ニ而右之段
上意其上致
拝領候

権現様ヨリ御書并御褒美家来致頂戴候覚

御書之写

和泉守不慮之仕合ニて候
相果不及是非候就ニ六左衛門
指越候和泉守ニ不相替馳走
肝要候謹言

七月廿五日 御直判

上田清左衛門とのへ
鈴木次右衛門とのへ
同 久左衛門とのへ

右ハ慶長五年奥州会津表 御出陣
之節曽祖父水野六左衛門後号日向守仕
仕野州小山ゟ上仕候處父和泉守相果
候段 上聞和泉守跡職六左衛門ニ被下
依之従小山三州苅屋江被遣候手前者

成下置候家来共致頂戴候

御羽織　茶地緞子

黄金一枚　上田平六

右ハ永禄七年三郎兵衛塚之寺内ニて取合
御座候節ニ一揆大将谷木弥右衛門を討
取并首鬼濤ニ而精出仕候ニ付其中上候所
為頂戴仕候御羽織子孫傳之而所持仕候

御羽織　浅黄地緞子　竹本助平

右者天正十年相模小田原御陣之刻御旗
本ニ而先手之御人数ニ相加り手強敵討人
討取ニ付而被為致頂戴候御羽織其以後
火事ニ而焼失仕候

御羽織　華鶴巻

黄金一枚　上田平六

右者天正十二年勢州表

下

御出陣之刻於船見之海邊下之高名仕候
御年六歳
御前江而　首壱ッ頂戴仕候御羽織ハ去辰火事ニ
類焼失仕候

御羽織　白地緞子　竹村左門

右者慶長五年濃州関ヶ原御陣之
刻於坂口　御馬入申候節当祖父
水野日向守曾孫より六之渡りと申所迄よ
被出申候其刻日向守言上仕候ハ加賀之江
添八郎左衛門父和泉守討死中判寺傍候ハ
時赤坂と鈴木与八郎と申者ニ而御座候与
八郎儀ハ当孫之陣処よ残シ置候当申上候処
左門儀御前江而　首壱ッ頂戴仕候御羽織
子孫伝之所持仕候

黄金　一枚
堀江又左衛門

右者関ヶ原御陣之刻曽祖父水野日向守
大垣城乗取候儀以使者注進仕候処
御前ニ而　召出致頂戴之候
黄金　一枚　　松田金右衛
黄金　一枚　　竹本廣助
右者卯年大坂御陣之節曽祖父水野
日向守於道明寺表敵合戦討勝申候由
以使者共申上候処
御前ニ而　召出致頂戴之候
以上
貞享元年三月十六日　水野美作守

水野隼人正

覚

一 権現様慶長五年関ケ原御陣之節祖父了八
水野隼人正忠清若名権十郎と申候拾六歳
而供奉仕候旗本ニ罷在候

一 同十九年大坂冬御陣之節隼人正儀書院番
一番白母衣ニ而供奉仕罷登候元和元年
五月七日大坂御陣之節
台徳院様御旗本御先備ニ而阿部野辺
中途より罷出候時惣先手松平筑前守利

常東ゟ備を立直し候ニ付、右之陣場ニ
手を出し候故、隼人正組中ゟ下知を加へ備を
押出、家込敵と出合、取合を合組中并
家人等を以、敵を追崩申候、御書院
番青山伯耆守組、大御番高木主水正
組ハ三備共未熟ニ而遅参り不申候
参り早く手ニ合申候、御帰陣以後
台徳院様於御前組中討死并働之承候

被御覧候而御加増被下候、右数度遂候
之節、御青山伯耆守・高野隼人正右之軍
忠之儀ニ付、承存分於御前申立仕候付
両人共閉門被仰付候、追而御赦免ニて
出勤候

一 翌年四月三日於駿府
權現様隼人正を被為召、召候而汝先祖代々
忠功有之、且親和泉守忠重之旧勲（勲）殊隼人正

今度大坂表ニ而御軍功有之励候段直ニ承
依之為其賞本領参河刈谷ニ而城弐万石ヲ
被下置候其外鎧并 上意之趣被為在候
御側土井大炊頭殿并年寄上野殿松平右衛門
大夫秋元但馬守殿出座 上意之趣被仰渡
候其中伝候曽祖父水野和泉守忠重戦
功之儀も水野美作守勝慶方より申上
候故私方ニ者書上不申候

以上

貞享元甲子年三月十日　水野隼人正忠直

土井周防守

同十九年夏天下飢饉
大猷院殿恤民生之餓莩使執政列衆諸
役奉行人毎度會于利勝舘而及豊
賑之沙汰是因利勝病氣不能登 城也
同廿年秋朝鮮人來朝使中根壹岐
守三使登 城之節雖利勝病衰之
勞當列衆之由利勝再三請免許
其後松平伊豆守来告 台命云

利勝存生之間爲 公爲天下尤速可
企登 城之旨利勝不得固辞登
城
正保元年七月利勝卒
大猷院殿哀惜之使阿部豊後守忠秋
賜御香奠銀子三百枚利隆謹拜恩賜
之厚

療且賜嫡遠江守利隆于御暇爲
父利勝看病也
同年八月依 御本丸回禄利勝父子
并醫師玄琢參府
同年十一月
大猷院殿渡御于利勝別墅利勝獻御
馬一疋青毛上感良馬逸足且相似以前
御乗馬小龍之由甚 御嘉色

同十八年四月
大猷院殿渡御于利勝館視病賜
御盃且被初召出利隆之舎弟八助七助
利勝再三雖奉辞不獲
此後利勝病少瘥登　城被恩赦乗輿
之後直到　御臺所且正朔之拝禮等
於別殿被下　御盃是慮利勝衰老之
軀令速退出也

御盃於利勝宅雖臥床乍着朝服
謹拜
台命之辱須戴　御盃
同年六月利勝奉　嘉恵往領地
古河保養病氣也使中根壹岐守
賜　御夜衣三領御寢巻四領是去頃御不
例之被召加早速御平復之佳兆因
賜云云利勝謹拜納

其後使宮崎備前守賜御樽肴於利勝
于古河
同月下旬伽孱宇陁戎船自今依被傳
上利勝嘗連署之由賜一樣之奉書
數通於古河是慮利勝病中書損也
利勝謹加判
同年七月利勝於領所患瘧（瘧）疾速達
上聞使齋藤攝津守問疾使野間玄琢シ

土井大炊頭利勝系譜寛永十九年
畢其中脱漏之數件或
公恩之辱或家門之榮何敢默哉是故
今錄家傳之羡談以獻焉
寛永十五年正月朔日利勝於殿中中風
卒倒從者扶之歸家之後
大猷院殿日々令近臣問樣子使野間玄
琢療養之半井驢菴岡本玄冶等依鈞

命來會于利勝館而及脉証治術之
評議
特使野々山新兵衛晝夜留于利
勝館言上起居飲食之委細醫師
之論説
同十六年正月元旦利勝因疾病不
能登城
大猷院殿恩顧之餘使久世大和守賜

恩賜御夜衣 三領 御寢巻 四巻 上使中根
壹岐守也其後使宮崎備前守賜御樽肴
利勝於古河瘧疾速達 台聽使齋藤
攝津守問疾使野間玄琢藥疾
同十八年四月十八日
大猷院殿渡御利勝館觀疾且召出利勝
幼子八助七助初見之被慰利勝衰老之
愁此後利勝病少[illegible]登城之時被赦乘輿
直到御臺所正朔之拜禮於別殿不列衆

速賜御盃使速退出慮老病之労苦也
正保二年七月利勝死
大猷院殿哀之使阿部豊後守忠秋賜御香
奠銀三百枚
寛永十八年八月三日
厳有院殿御誕生兵庫頭利長自御七夜之
日奉仕焉

寛永末年土井大炊頭利勝献系図之
後
大猷院殿恩賜之辱雖不係国家之大功
於分為美談故記四五條以献之
寛永十五年正月朔旦利勝於殿中暴
中風帰家之後
大猷院殿日々令近臣問疾使野間玄
琢寮之半井驢菴岡本玄冶同蒙

台命侍利勝館考方劑合藥之事且使
野々山新兵衛留宿利勝館言上飲食之、
多少醫師之論談

同十六年正月元日

大猷院殿憐利勝病廢不能登城有懐舊之
情使久世大和守持御盃賜利勝宅利勝
雖卧床著朝服拜　鈞命之辱頂戴御盃

同年

台命使利勝往領所古河保養病

土井式部少輔

大猷院様

十二月九日　御諱　御判

土井大炊助殿

今度令上洛ニ付而
のこる處なく海道くまなく
公方様種々殊ニ御振舞有よ
あまり〳〵至極存候まゝ
出し事ニ候処か様ある
くれ〳〵より仰付候ハ御速く
第一上ハ故と満足なる
語　御前ニ候哉又ハ
や

大猷院様
後八月十日　土井大炊助との人　御判

公方様御まへにて殷第事
相たのミ候而後存より不
義ともに申よのこと書
あれ志よあるてひろしくい
口上よて申ひ候へし

貞享元年三月廿六日

土井周防守利益　上

其元弟事念入候由
令祝着候猶御前へ候て
能様相心得候旨可申也
大猷院様
八月十九日　御諱御判
土井大炊頭とのへ

右之其元和立候時分ニ於様そ
被下候きつとしよ志あをを

日本政府図書

天和四年二月日
土井式部少輔
上

小林政灼
清水兼珍 交

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan